

Ⅱ 普通作物

【土づくり対策】

- (1) 稲わら還元のほか、完熟堆肥を積極的に投入する。
- (2) 含鉄資材やケイ酸質、りん酸質資材を適切に施用する。
- (3) 生育障害を発生させないように土壌管理に留意する。
水田では適度な深耕を実施するとともに、灌漑、排水調節の利便性に配慮する。
多湿田では、冬～春期などに乾田化に努める。
畑作物では、排水対策に充分配慮する。

【施肥上の一般的注意】

- (1) 地域や農家の実態に即した肥料の種類や施肥法を考慮する。
- (2) 基肥の施用にあたっては、品種特性、作期、栽培法、土性、輪作体系等の条件を十分考慮する。
- (3) 追肥や穂肥についても、対象作物、品種の相違に対応するとともに、生育状況や気象予報等を勘案して適正施用する。
- (4) 施用した肥料が効率的に利用されるよう、圃場管理に配慮する。

水 稻（育苗）

1 施肥基準設定の基礎

稚苗、中苗、成苗とも用土として山土を用いることを原則として設定する。粒状培土や育苗用成型マットを使用する場合は、育苗基肥は施用せず、生育経過に応じ、追肥施用のみに留める。

2 1箱当たり施肥量(g)

苗の種類	栽培型	N	P ₂ O ₅	K ₂ O
稚 苗	早 期	1.2	1.2	1.2
	普通期	1.0	1.0	1.0
中 苗	早 期	1.0(基肥1.0g、2葉期0.5g、 3葉期0.5g)	2.0(同左)	2.0(同左)
	普通期	1.5(基肥0.5g、以下同上)	1.5(同左)	1.5(同左)
成 苗	早 期	0.8(基肥0.3g、追肥2~3回施用)	0.8(同左)	0.8(同左)
	普通期	0.6(基肥0.2g、以下同上)	0.6(同左)	0.6(同左)

3 施肥方法及び留意事項（施用量単位：g/箱）

(1) 稚苗育苗

- 1) 育苗用液肥を用いる場合は全量基肥とし、1箱当たり600~1,000mlの水にとかし、灌水時に施用する。
- 2) 粒状肥料を用いる場合は全量基肥とし、床土に混和する。
- 3) 硬化期に下葉の黄化が見られたら、窒素成分換算で基肥に1.0g、2.0葉期に0.5g、2.0葉期に0.5g程度の追肥を行う。

(2) 中苗育苗

- 1) 早期栽培：分施肥とし、N成分換算で基肥に0.5g、2.0葉期に0.5g、3.0葉期に0.5gを施用する。
- 2) 普通期栽培：分施肥とし、窒素成分を基肥に0.5g、2.0葉期に0.5g、3.0葉期に0.5gを分施肥する。

(3) 成苗育苗

- 1) 分施肥とし、基肥の窒素成分は、早期栽培で0.3g、普通期栽培で0.2g程度とし、1.5葉期以降に適宜追肥を行う。

水 稻 (本 田)

1 施肥基準設定の基礎

土壌条件、品種、作期などによって施肥量は異なるが、乾田の壤土における各地帯の標準的収量確保を目安として施肥基準を設定する。

2 10a当たり施肥量(kg)

【慣行施肥法】

栽培 型	地 帯	N				P ₂ O ₅				K ₂ O				
		基肥	早期追肥	穂肥	計	基肥	早期追肥	中間追肥	計	基肥	早期追肥	中間追肥	穂肥	計
早 期	各 地	3~5	1	2~3	6~9	4~7	1	(2~3)	5~11	4~7	1	(2)	2~4	7~14
普 通 期	県 南	4~5	0	3	7~8	4~5	0	(3~4)	3~8	4~7	0	(2)	2~3	6~10
	県 北	5~6	0	3	8~9	5	0	(4)	5~9	6	0	(4)	3	9~13
	山 間	4	0	3	7	3	0	(2~3)	3~6	4	0	(2~3)	3	7~10

注) 耐倒伏性、耐病性の弱い品種は表中の下限数量を基本とする。前作残肥がある場合は、減量したり、基肥無施用とする。リン酸、加里成分の計の欄は、最下限値から中間追肥を含む上限値までを表示。

【側条施肥法】：田植時に側方の土中に同時施肥する方法

栽培 型	地 帯	N				P ₂ O ₅				K ₂ O				
		基肥	早期追肥	穂肥	計	基肥	早期追肥	中間追肥	計	基肥	早期追肥	中間追肥	穂肥	計
早 期	各 地	2~4	0~1	2~3	4~8	3~5	0~1	(2~3)	3~9	3~5	0~1	(2)	2~3	5~11
普 通 期	県 南	3~4	0	3	6~7	3~4	0	(3~4)	3~8	3~4	0	(2)	2~3	5~9
	県 北	4	0	3	7	5	0	(4)	5~9	5	0	(4)	3	8~12
	山 間	4	0	3	7	3	0	(2~3)	3~6	3	0	(2~3)	3	6~9

注) 耐倒伏性、耐病性の弱い品種は表中の下限数量を基本とする。前作残肥がある場合は、さらに減量したり、基肥無施用とする。リン酸、加里成分の計の欄は、最下限値から中間追肥を含む上限値までを表示。

【基肥 1 回施用型肥料の施肥法】

肥効調節型肥料（基肥 1 回施用のみ）を施肥する方法

(kg/10a)

栽培型	地 帯	N	P ₂ O ₅	K ₂ O
		基 肥	基 肥	基 肥
早 期	各 地	5~8	5~6	5~6
普通期	県 南	7~8	5~7	5~8
	県 北	7~8	5~6	5~8
	山 間	7	5~6	5~8

注) 側条施肥方式で施用する場合は、10~20%減量する。

耐倒伏性、耐病性の弱い品種は表中の下限数量を基本とする。

前作残肥がある場合は、減量または基肥無施用とする。

3 施肥方法及び留意事項（施用量単位：g/箱）

(1) 稲わら還元とともに堆肥の施用（10a当たり600kg程度）に努める。

(2) 土壌改良資材としては、含鉄資材160kg~200kg、もしくはケイカル（140kg）＋ようりん(60kg)などを連年施用する。

(3) コシヒカリは倒伏による収量、品質の低下を避けるため、表中の下限施用量を標準とする。

野菜跡など残肥がある場合は、基肥の施用を控えるか、必要最小限に留める。

コシヒカリの穂肥施用時期は、出穂期の15日前以降とする。他品種は20~30日前頃に施用する。

(4) 早期追肥は、移植後7~10日以内に施用する。中間追肥は、出穂期の35日前頃に施用する。

実肥は食味低下につながるので施用しない。

(5) 側条施肥方式の場合、肥料が効率的に利用されるので、施肥量は標準より10~30%減らす。

(6) 基肥 1 回施用型肥料は追肥や穂肥の施用を要しない。コシヒカリ、ハナエチゼン、キヌヒカリ、日本晴など品種や土壌に応じた銘柄を選定し、上表の基準に応じ、適量を施用する。

(7) 酒造用好適品種である「山田錦」の施肥法は、窒素成分含量（10a）で、基肥に1~2kg、早期追肥に1kg、穂肥（出穂期の20日前以降）として2~3kg、合計4~6kgの施用を基準とする。

この他、中間追肥として P K 肥料を出穂期の35日前頃に適量を施用する。

麦 類

1 施肥基準設定の基礎

麦類栽培地帯の標準的土壌における標準的収量を目安として施肥基準を設定する。

2 10a 当たり施肥量(kg)

麦の種類	栽培法	N	P ₂ O ₅	K ₂ O		
		基 肥	基 肥	基 肥	追 肥	計
小麦 裸麦	全面全層播 ドリル播き	6~7	6~8	6~7	1	7~8
ビール麦	全面全層播 ドリル播き	6~7	6~8	6~7	1	7~8

注) 条播の場合は、2割程度減肥する。

3 施肥方法および留意点

- (1) 堆肥を10a当たり800kg、苦土石灰を100kg程度施用する。
- (2) ビール麦は全量基肥とする。
- (3) 追肥の施用時期の目安は、裸麦が3月上旬、小麦は3月中旬である。この追肥にリン酸成分を含む肥料を使用しても差し支えない。
- (4) 土壌肥沃地では、施肥量を減量する。

大 豆

1 施肥基準設定の基礎

転作水田及び中山間部畑地において、秋大豆を栽培する場合を基準に設定する。
(収量目標10a当たり300kg、畑250kg)。

2 10 a 当たり施肥量(kg)

区 分	N	P ₂ O ₅	K ₂ O
水 田 (初年田)	0	8	8
水 田 (連作田)	2	5	6
畑	2	5	6

3 施肥方法および留意点

- (1) 堆肥は初作田や畑で10a当たり600kg、連作田では800kg、石灰資材（例えば苦土石灰100kg程度）については耕起前に施用する。
- (2) 水田転作初～2年目は、過繁茂とならないよう窒素の施用をさける。
- (3) 水田転作の連作田では、3年目以降基肥に窒素を施用する。
- (4) 肥料は窒素含量の低いものを用い、全量基肥として、全面に施用する。

そ ば

1 施肥基準設定の基礎

中山間部の畑地および水田転作ほ場において栽培する場合を基準とする。
(収量目標：10a当たり 150kg)。

2 10 a 当たり施肥量(kg)

区 分	N	P ₂ O ₅	K ₂ O
畑	2.0	6.0	6.0
水 田	0～2.0	6.0	6.0

3 施肥方法および留意点

- (1) 排水良好なほ場で栽培する。多湿の場合は、排水対策を十分に講じる。
- (2) 堆肥を10a当たり600kg前後施用する。また苦土石灰などの石灰資材を100kg程度施用し、土壌を弱酸性～中性に整える。
- (3) 化成肥料の場合は、基準に即した窒素成分の低いものを用いる。全量基肥を原則とする。
 - 1) 畑地で全作物の残肥が多い場合は、窒素成分施用量を減じる。
 - 2) 一般水田栽培では基肥は無窒素とする。追肥が必要な場合には、土寄せ時に適量施用する。
 - 3) 連作ほ場では基肥を基準に即して施用する。

